NPO 法人
JECK
国際協力専門家コンサルティング

International Cooperation
Experts' Consulting

JECK2020年度 上期活動ニュース

NPO法人JECK 2020年度総会を開催(2020.06.27)

今年の年次総会はコロナウイルスの影響で例年4月に開催していたが大幅に開催時期が遅れ、JICA横浜センターが閉鎖されたこともあり、場所を代えて横浜市技能文化会館で6月27日に開催した。参加者は会員16名(委任状10名)で総会は成立し、2019年度事業活動報告、同収支決算報告、2020年度事業計画、同収支予算、役員改選等の議案が審議承認された。
総会後の理事会にて次の4役を選任した(敬称略　関連記事P2参照)

理事長	吉田 博至(新任)
副理事長	松田 勲(新任)
副理事長	若林 敏雄(新任)
事務局長	大平 一昭(新任)
監事	加藤 博通(新任)
監事	小泉 由紀子(新任)

新型コロナウイルス感染症(COVID19)蔓延の影響と対策

1月末に発生した新型コロナウイルス感染症(COVID19)の蔓延は、JECKの活動も深刻な影響をうけた。

1. JICA横浜センターが閉鎖されたので、総会は、6月に延期し、横浜市技能文化会館で開催した。
2. 5月度の理事会は中止、6月度の理事会は横浜市技能文化会館で開催、7月以降は、Zoom Meetingによるリモート会議で開催した。
3. 例年JECKが候補者を推薦している、神奈川県招聘海外技術研修員の募集は中止された。
4. 夏季フォーラムは、Zoom Meetingを使用してリモート会議方式で実施した。
5. 横浜NGOネットワーク等が共催し、例年JECKが参加している、よこはま国際フェスタ(10月)は中止される。
6. 同上2021年2月開催予定のよこはま国際フォーラムは従来の発表会形式は行わず、ウエビナーによる開催を検討中。
7. JECK会員が国際理解教育として受託した関東学院大学、明治学院大学の講義、及びゲストスピーカーとして参画する立命館大学への講義はリモート講義方式が採用される。

2020年度新役員 JICA横浜センターを表敬訪問(2020.07.21)

今年度のJECK役員交代に伴い、新3役がJICA横浜センターを表敬訪問し、NPO法人JECKとしての2020年度事業計画等を説明した。

出席者　JICA　熊谷晃子所長、殿川広康次長、石亀敬治課長
JECK　吉田博至理事長、松田勲副理事長、若林敏雄副理事長、大平一昭事務局長、福田信一郎相談役

オンライン理事会の開催

新型コロナ感染蔓延及びJICA横浜センターが閉鎖されたため、7月度以降の理事会は、Zoom Meetingを使用したオンライン・リモート会議で実施した。事前に、黒川理事により、Zoom Meetingの講習会が実施された。

2020年度夏季フォーラム(2020.08. 22)

夏季フォーラムを8月22日14:00～16:00にZoom Meetingを使用したリモート会議方式で開催した。14名の会員が自宅から参加し、フリーディスカッションを行った。事前のZoom使用法講習会の実施、黒川理事がファッシリテーターとして絶妙に会議をコントロールした効果もあり、最初のオンライン行事は、無事終了した。

END

2020年度役員挨拶

理事長就任のご挨拶　吉田 博至

本年は新型コロナウイルスの影響で、今まで経験したことのない多難な年になり、JICAはもとより我々JECKも 種々の事業に影響が出ております。ご存知のように例年4月に開催するJECK総会も6月27日にやっと開催出来た状況であり、事業報告、収支報告等と共に理事と監事が決定されました。役員3役は互選と我々の定款で定められておりますので、7月11日(土)開催の新理事、監事出席の理事会で決定されました。

NPO法人JECKとしましては、事業重視という考え方で、大きく海外事業関連(松田副理事長担当)と国内事業関連(若林副理事長担当)に体制を分離し、更に若手理事4名の参画を得て新規事業開拓に重点を置くことに致しました。また、JECK全会員の総力を事業に結集すべく共通した得意分野、或いは近いと思われる分野の会員をグループ化して会員能力の相乗効果に期待したいと考えております。当面は「XXX研究グループ」のような形態になるかもしれませんが、一人でも多くの会員が参画・参加戴けることを期待しております。

目標は国際協力事業、国内大学生対象の国際理解教育或いは語学教育事業を通じて参画・参加された方への人件費支給を早期に実現「事業を楽しみ実益を得る」することです。今はコロナウイルスの逆風が吹き荒れています。この逆風に逆らって進むヨットのようにジグザグでもよいから目標に逞しく進みたいものです。逆風に立ち向かう道具として、リモートワーク或いはリモートミーティングの活用も立命館大学教授黒川清登先生(JECK理事)のご協力で8月から始める計画をしております。「国際協力専門家コンサルティング」の名前に負けないように皆様と共にチャレンジしていきましょう。よろしくお願いいたします。

副理事長就任のご挨拶　松田 勲

このたび、副理事長を拝命致しましたが、昨年10月から新生NPO法人として掲げた事業計画を推進するため、理事長の補佐役としてお役に立てるよう邁進する所存です。

昨年末からの新型コロナ感染拡大により、各種事業が制限を受け、経済活動が難しくなっている状況下ですが、会員のみなさんが培ってきた国際感覚、見識や人脈と共に他団体との連携によるコラボレーション等により、持続可能な事業推進体制を築いていきたいと思います。よろしくお願い致します。

副理事長就任のご挨拶　若林 敏雄

会員の皆様におかれては、ご健勝でお過ごしのことお慶び申し上げます。この度、副理事長を拝命し、責任の重大さを痛感しております。誕生して1年に達しない法人ですが、理事長をはじめ理事、会員の皆様のご指導を受けながら、JECKに新しい息吹を吹き込み、活力ある法人にしていきたいと思っております。

担当は国内事業関係、特に大学などにおける国際理解教育事業ですが、すべての関係者が恩恵を受けられるよう事業を展開していきたいと思います。本年度は新型コロナの問題により、これまでのように活動が出来ないかも知れませんが、精一杯努力していきたいと思いますので、何卒よろしくご指導、ご鞭撻くださいますようお願いいたします。

事務局長就任挨拶　大平 一昭

「世の中には「まとめる側」に立つ人と、「要求する側」にたつ人の二通りがある。後者は周りにお構いなく自分の利害を述べ立てる。こういう人ばかりでは組織はうまく動かない。例えば、地域社会では時には自分の主張を抑え、時には泥水を被る役割が必要である。」というのが、元自民党幹事長加藤紘一氏の持論だそうです。(朝日新聞天声人語2015.01/17より抄録)

JECKに置き換えると、理事長、副理事長は、強力なリーダーシップでビジョンを示し、プロジェクトを推進する。事務局はこれをサポートする役目だと思います。ここで2017年に初めて事務局長に就任した時も同じ趣旨の文章を書いていたことに気づきました。進歩の跡が見られないといえばそれまでですが、前回は無我夢中で努力した割には得られた成果には満足できませんでした。今回はじっくりと構えて業務を粛々と進めて、微力ながらJECK運営の円滑化に努めます。

NPO法人JECK、監事就任ご挨拶　加藤 博通

NPO法人における監事の職務は特定非営利活動促進法・第十八条 監事は次に掲げる職務を行う。一)理事の業務執行の状況を監査すること。二)特定非営利活動法人の財産の状況を監査すること。三)前二号の規定による監査の結果、特定営利活動法人の業務又は財産に関し不正の行為又は法令若しくは定款に違反する重大な事実があることを発見した場合には、これを社員総会または所轄庁に報告すること。四)前号の報告をするために必要がある場合には、社員総会を招集すること。五)理事の業務執行の状況又は特定非営利活動法人の財産の状況について、理事に意見を述べること。と規定されています。

即ち、「NPO法人JECKの活動方針である「国際協力」「社会教育推進を図る活動」「職業能力の開発又は雇用機会の拡充支援」を法令順守のもと積極的に活動し、健全なNPO法人として発展することに貢献いたしたいと思います。

監事就任ご挨拶　小泉 由紀子

NPO法人JECKになり、監事の職務権限及び責任が重視され、定款では次のように規定されています。

(1)理事の業務執行状況の監査
(2)財産の状況を監査
(3)監査の結果、不正行為,法令定款に違反する重大な事実があることを発見した場合には、これを総会又は所轄庁に報告する。
(4)必要な場合には、総会を招集すること。
(5)理事の業務執行の状況、財産の状況について、理事に意見を述べ、若しくは理事会の招集を請求すること。

監査を誠実に推進することが、法人JECKの進展に寄与することを念じ業務に精励します。

END

関東学院大学・明治学院大学・立命館大学のJECK受託講座「国際協力の現場」

若林 敏雄*

関東学院大学、明治学院大学に加えて今年度は立命館大学からも「国際協力の現場」講座を受託した。コロナ禍による感染防止のため講義は、オンライン方式及びハイブリッド方式（対面+オンライン）で実施する。

関東学院大学

関東学院大学経済学部におけるJECK講座「国際協力の現場」授業は、大学学習支援システム「manaba」及びZoomを活用したオンラインで行われる。学生は授業当日「manaba」上にある学習の概要を通して授業内容を確認後、「manaba」上にある講義動画を約60分間視聴して学習する。

その後、学習の概要上にある「振り返りポイント」を基に学習した内容をノートにまとめる。全15回の授業の内、第1回はガイダンスであり、3回の小テストが組み込まれている。60分間の講義動画ファイルはZoomやパワーポイントを用いて担当者によって作成され、20分間3本の動画ファイルとしてまとめられる。コロナ禍下とはいえ、学生が満足する講義を実施しなければならず、担当者に期待するところは大きい。授業の日程は右の通りで、石黒が担当する。

回	実施日	講師	講義タイトル
第1回	9月24日	石坂　貴美	ガイダンス（大学担当）（オンライン型授業、評価、受講上の注意など）
第2回	10月01日	石亀　敬治 JICA	開発途上国の現状と政府開発援助（ODA）
第3回	10月08日	吉田　博至	中東地域における職業と経済活動を考える（電気・電子分野）
第4回	10月15日	福田信一郎	欧州復興開発銀行（EBRD）市場経済移行支援プログラムによる中央アジアの民間企業の市場経済移行支援業務に従事して
第5回	10月22日	石坂　貴美	小テスト（大学担当）
第6回	11月05日	黒川　清登	リユース・リサイクル技術導入による廃バッテリーの循環産業構築 コートジボワールでの取り組み -民間企業の開発途上国における新たな役割-
第7回	11月12日	中泉　拓也	パキスタンの規制改革とその後のフォローアップ
第8回	11月19日	石井　信行	ITによる国際協力の現場からの報告
第9回	11月26日	久米　秀俊	カンボジアの物流改善とJICA専門家の取り組み
第10回	12月03日	石坂　貴美	小テスト（大学担当）
第11回	12月10日	北島　博司	2020年版「病院プロジェクトから見えてくる国際協力の現場とその変遷」 -容認しがたい医療（経済）格差を埋めるために-
第12回	12月17日	内田　勝巳	ミャンマーの貧困と地方開発
第13回	1月07日	小川　忠之	開発途上国における再生可能エネルギー普及の課題と支援
第14回	1月14日	田中　秀幸	途上国の発展とODAの現状および限界に関する見解 -南太平洋とアフリカとの比較を通して-
第15回	1月21日	石坂　貴美	小テスト（大学担当）

明治学院大学

明治学院大学国際学部秋学期の授業科目「国際学特講1」（国際協力の現場）（2単位）の授業は昨年度に引き続き実施されるが、コロナ禍により授業はハイブリッド型授業（対面授業+ライブ配信+オンデマンド配信）及びオンライン型授業（Zoomによるライブ配信+オンデマンド配信）の2つのタイプで実施される。

学生は、授業当日までにシラバスに書かれた予習課題レポートを「manaba」上に提出し、オンデマンド配信終了までに、リアクションペーパーを「manaba」上に提出することが求められる。講師はそれぞれを採点すると共に、リアクションペーパーに対しては全体としての講評の記入が求められる新しい形の授業形態であるが、学生にとって魅力ある授業が求められる。授業は右表の通りで、担当は若林である。

回	実施日	講師	講義タイトル
第1回	9月25日	石亀　敬治 JICA	開発途上国の現状と政府開発援助（ODA）
第2回	10月02日	福田信一郎	ウズベキスタンにおける人材開発プロジェクト
第3回	10月09日	久米　秀俊	カンボジアの物流改善とJICA専門家としての役割
第4回	10月16日	北島　博司	病院プロジェクトから見えてくる国際協力の現場とその変遷 -容認できない医療（経済）格差を埋めるために-
第5回	10月23日	沖中　高行	一言では語れない複雑な国、中国について
第6回	10月30日	黒川　清登	フィリピン共和国　ウエップカメラによる洪水の早期監視システム
第7回	11月06日	木村　剛	「三角協力の目指すところと、その展望」 -ハイチで実施したプロジェクトの事例から-
第8回	11月13日	石黒　功	米国IT動向とベンチャ事情
第9回	11月20日	加藤　博通	財務管理を中心とした中小企業の経営改善
第10回	12月27日	内田　勝巳	ミャンマーの貧困と地方開発
第11回	12月04日	冨永　秀雄	農民の側に立った国際協力（農民の心に火を灯す）
第12回	12月11日	田中　秀幸	援助の現状と限界について -南太平洋とアフリカとの比較を通して-
第13回	12月18日	小川　忠之	開発途上国における再生可能エネルギー普及の課題と現状
第14回	1月08日	植岡龍太郎	開発途上国での生活と安全管理のために

立命館大学

JECK会員で立命館大学経済学部教授の黒川清登氏は、担当科目（開発経済学、国際開発プロジェクトマネジメント論、開発経済学演習Ⅰ、開発経済学演習Ⅲ）の講義（60回）の内、8回分をゲストスピーカーとしてJECK会員を招待した。

各スピーカーのテーマ、実施日は右表の通りであり、Zoomを活用して行われる（10月の実施分は決定しているが、11月以降の実施日は予定である）若林が担当する。

END

	科目名	実施日	ゲストスピーカー	テーマ
1	開発経済学演習Ⅰ	10月12日	吉田　博至	中東に於ける職業と経済活動を考える（電気・電子分野）
2	開発経済学演習Ⅲ	10月19日	内田　勝巳	ミャンマー民主化とJICA「ミャンマー貧困削減地方開発事業」
3	開発経済学	10月20日	小野寺秀逸	タイ・インドネシアの中小企業製造業の実態
4	開発経済学演習Ⅰ	10月26日	小川　忠之	開発途上国における再生可能エネルギー普及の課題と現状
5	開発経済学	11月17日	石井　信行	ITによる国際協力の現場からの報告
6	開発経済学	12月01日	田中　秀幸	途上国の発展とODAの現状および限界に関する見解
7	国際開発プロジェクトマネジメント論	12月02日	田中　秀幸	国際援助における開発プロジェクトマネジメント（PM）の現状と課題
8	開発経済学演習Ⅰ	12月07日	内田　勝巳	ミャンマー民主化とJICA「ミャンマー貧困削減地方開発事業」

*わかばやし としお　JECK会員、東海大学名誉教授　専門分野:電磁波工学、通信工学　JICA任地:タイ、ラオス、マレーシア

エチオピア草の根プロジェクト奮闘記：その3　暴動からの脱出

田中 秀幸*

この報文は、JECK会報第34号に掲載した「エチオピア草の根プロジェクト奮闘記:その2 プロジェクトの実施」の続編である。

プロジェクト発足後、8ヶ月後にしてようやく養魚池の建設を開始した。プロジェクトが用意したシャベル、クワ、ツルハシ、手押し車を使い旧地主らを中心にして住民によって、まずは草が覆っている表土剥ぎ、そして地下の浸透水を防ぐ工事を開始した。

地下の浸透水を防ぐための地下ダムの建設

その後作業が一週間進んだところで事件が勃発した。2016年10月2日、仕事を終えてホテルへの帰路、途中の国道沿いの町マキで暴動が起きているらしいという情報を得た。運転手と相談し、日没も迫っていたことと、マキを通らずにはホテルに戻ることもできないので、とにかくできるだけ近くまでに行くことにした。

マキまであと7kmのところで青年8名に車を止められた。車を燃やすから降りろという。びっくりして我々の業務の話をして、解放してもらおうとしたが、納得せず、運転手は仕方ないのでお金で解決するしかないだろうということになり、双方でお金を渡したら、行っていいということになり、発車した途端にいきなり後ろから矢継ぎ早に石が飛んできた。

未舗装の凸凹道を蛇行しながらフルスピードで逃げたが、石の一つがピックアップの後の窓ガラスを割り、筆者のヘッドレストに当たった。ほぼ拳大の大きさでずっしりと重い石だった。頭は砕けたガラス片で一杯だった。ヘッドレストがなかったらおそらく死んでいたことだろう。

マキに行くのを断念し、偶然知り得たオロミア州水道公団の飯場に避難させてもらった。飯場のマネージャーはマキの事情を把握していて、古びた折り畳みの簡易ベッドを出させ泊めてくれた。夕食も提供されて大変有り難かった。車は後輪の板バネが両方で3枚折れていた。

投石被害

翌朝6時前にマキにいる公団職員がオートバイで知らせに来た。ホテルのあるズワイでは暴動は起きていない由、そしてマキは今すぐ行けば通過できるだろうというので、マネージャーにお礼を行って大急ぎでマキに向かった。町の入り口のところで大型のトレーラートラック3台が国道を塞いで横倒しにされて燃やされていて、まだ煙が出ていた。

近くには兵隊がいたので暴動は鎮圧されたようだ。国道沿いの家が数軒燃やされていた。町の出口付近では道を塞ぐのに使われた石や燃やされた古タイヤが散乱していた。大急ぎでズワイの町まで走った。ズワイに来るまでの途中にも道路閉鎖をした跡がいくつもあった。丁度、ベースライン調査で着任したばかりの女性要員二人と合流した。

暴動で燃やされた大型トラック

JICAエチオピア事務所からは、「警備がしっかりしているホテルに全員で待機して、安全が確認されたら早急に首都アディスに引き上げるよう」にとの指示があった。長期契約していた木賃宿を出払って、全員一緒に高級リゾートホテルに移った。

運転手やズワイにある水産研究センター職員らから、暴動の原因やマキでの被害状況、アディスや他の地域の状況等々情報集めに終始した。インターネットや電話はつながらない。ズワイの南でも住民による道路閉鎖が続いているという。二日後にズワイに軍の司令官が配属され、警察が軍の指揮下になったという。ズワイの町から外には出られないため大型のトラックやタンクローリー、長距離バス、乗合ミニバス、乗用車、ツアー用バン等であふれていた。途中投石で窓ガラスが破られた埃だらけのランクルもいた。

我々の車は板バネを交換し、割れた窓にはとりあえずベニヤ板を施した。事態はなかなか好転せず、友人の水産センター所長にズワイ脱出計画について相談を始めた。10月7日金曜日の朝突然彼がオートバイで現れ、軍が我々を護衛してズワイを脱出させてくれるので至急警察署まで来るようにとの由。彼は懇意にしているズワイ市長に相談し、市長が司令官に頼んでくれたそうだ。友人というのは実に有難い。

大急ぎでホテルをチェックアウトして計5人2台の車で警察署前に行き、彼が待っていてくれて司令官を紹介してくれた。その後、ちょっと待てということで待機していたが、1時間待っても2時間待っても何も起きなかった。そうこうしているうちにどういう訳か警察署前には大型のトラックやタンクローリーが続々と集まってきた。

我々がアディスに行くという情報を得て集まってきたようだ。結局11時半にコンボイ方式でこれらトラックと一緒にアディスに向かった。運転席の屋根の上に自動小銃を置いて構えている兵士、それに荷台のベンチにはマスク代わりのスカーフをし銃を持った兵士12名を乗せたトヨタのピックアップが到着し、これから出発するという。

警護してくれた兵士の車

我々の2台は最後尾を走ることになった。時速100kmは出ていたかと思う。大型車は全部で8台。軍の護衛車は先頭に行ったり、我々の後ろについたりして警護してくれた。途中マキの手前、道路閉鎖があったところでもう一台の女性要員をのせた車がパンクした。しかし、前を走るトラック隊と護衛車は止まらずそのまま突っ走り、我々だけが置いてきぼりを食らった。運転手二人が大急ぎでタイヤ交換し、こちらは辺りを見回しながら気が気でなかった。

燃やされたトラックの横を過ぎて、町を出たところで護衛車が待っていてくれて、ほっとした。でもトラック隊は止まらず走ったままである。猛スピードでトラック隊に追いつき、護衛車は先頭に向かった。次の町では暴動は既に鎮圧されていて、通りには警官や軍隊が出ていた。

その次の町で待機していた別の護衛車に引き継がれ、このままアディスまで行ってくれるのかと思ったらアディスに繋がる高速道路の入り口で護衛が終了した。高速道路は大丈夫だという。兵隊にお礼をして別れ、高速道路に入り50km先のアディスに向かった。

ところが高速を出てアディス市内に入るところでも暴動が起き道路閉鎖が行われているとのこと。市内に入る三つあるルートのうちJICA事務所からここなら大丈夫だろうという道路を教わり進んだところ、オロミア州のカウンターパートからそこは危険なので別の道を通るよう指示され、急遽方向転回した。結局、カウンターパートが指示してくれた道が正解だった。アディスは至って平静であった。昼食も取らず朝から緊張した時間が続いたため、ホテルに入った時は本当にホッとした。

翌日からすぐに帰国準備を開始し、ヒルトンホテル内のエチオピア航空事務所で帰路変更して、翌日オロミア州並びにJICA事務所でそれぞれ帰国報告をし、11日の夜半アディスを立ち12日の夜に全員一緒に帰国した。

暴動の原因は10月2日にアディスの南東約40kmのビショフト地区でオロモ族の雨期明けを祝う感謝祭が行われていたが、反政府的な参加者が式典を乗っ取り、反政府スローガンを叫び始め、それが抗議デモに発展した。これを制圧しようと治安部隊が催涙弾を撃ったところ、逃げ出した参加者たちが狭い谷間に殺到し折り重なるように次々と倒れた。約100人以上の死者が出たと言われている。発砲で死んだ人もいるとの情報もある。このニュースをSNSで知ったオロミア州の各都市の青年たちが連鎖反応的に蜂起し、各地で反政府運動に発展し、政府役所や政府の中核を担っていた特にティグライ族の家や商店が焼打ちされ、各地で道路封鎖がおきた。

この騒動により、プロジェクトは翌年の感謝祭が終わる10月まで一年間活動休止になった。2017年11月に活動を再開し、お世話になった水道公団の飯場に礼を言いに行ったところ、なんと、飯場は我々が出た2日後に襲撃・放火された由。跡形もなく、ダンプトラック2台も燃やされていて無残な光景を目の当たりにし身が縮む思いであった。(続く)

END

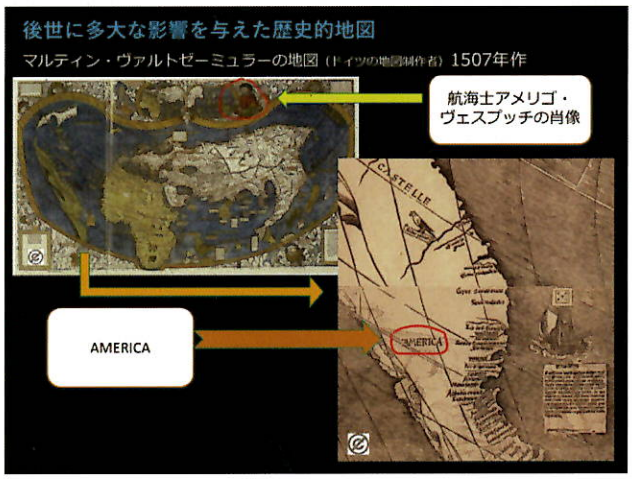
*たなか・ひでゆき　NPO JECK / NPO JECKA会員　(株)バイオインダストリーズジャパン代表取締役　専門分野:水産養殖開発、沿岸資源管理
JICA任地:主にインドネシア、エチオピア、エルサルバドル、フィジー、バヌアツ、トンガ、サモア　JICA以外の任地:太平洋島嶼国、タイ、インドネシア、エチオピア、ジブチ、サウジアラビア、エジプト、イラン、モーリシャス等

「500年、でも今なんで?」

北島 博司*

歴史を揺るがした世界地図といえば、プトレマイオス?それともトスカネリの地図?

いや今ならきっとグーグル・マップでしょうか。少しく500年前を振り返ってみましょう。コロンブスが死去した翌年の1507年、ドイツの地理学者マルティン・ヴァルトゼーミュラーが作成した地図に、南米大陸の「発見者」だとしてアメリゴ・ヴェスプッチの肖像画と陸地の名前が記されてしまいます。なんとコロンブスではなかったのです(図参照)。その時から「新大陸」全域を指す言葉としてそれは「コロンブス」でも「インディアス」でもなく「アメリカ」が独り歩きして行くことになります。(イタリア人のAmerigoはラテン語読みではAmericus)かくして新大陸は南北アメリカとかU.S.A.と呼ばれるようになったのです。まさに歴史を揺るがした地図と言えましょう。



一方、コロンブスの方はと言えば、「コロンブスの地」という意味のラテン語読みで「Columbia」が世に知られます(スペイン語ではColombia)。南米の「コロンビア共和国」の国名になり、米国ではコロンビアと言う名の3都市と、コロンバスと言う5都市も現存しています。そして何よりも米国の首都であるWashingtonD.C.のDCとはDistrict of Columbia (コロンビア特別区) なのです。こうしてみると米国はコロンブスとはそう簡単には縁を切れないことがわかります。

タラレバですが、もしもヴァルトゼーミュラーがあのとき間違いを犯さなければ米国はきっと「コロンビア合衆国」とか「コロンバス共和国」そして南北コロンビア大陸と言った呼び名になっていたかも知れません。

その米国が分断の危機にさらされています。ミネソタ州ミネアポリスで白人警官が黒人のジョージ・フロイドさんを死に至らせたことから、各地で人種差別に抗議する大規模なデモが発生しました。それがBlack Lives Matterの声となって植民地時代の指導者や奴隷商人像の破壊に発展し、独立宣言起草者トーマス・ジェファソン第3代大統領の像や、南北戦争で奴隷解放のために戦ったグラント北軍総司令官までもが引きずりおろされ、それが瞬く間に世界に飛び火したのです。

英国では奴隷貿易商人エドワード・コルストンの像が。砂糖農園で多くの奴隷を所有していたロバート・ミリガンの像も。宰相チャーチルの像が安全のため?に板で囲われました。ベルギーでは元国王レオポルド2世の像が撤去され、米国各地ではその煽りを食うかのようにコロンブス像までもが倒されているのです。人種差別や虐待の過去がある人物像への攻撃。このままだと今ある偉人像の多くが(一方的・近視眼的なこじつけ、あるいは不満のはけ口として)破壊される羽目になりかねません。

ここで1992年コロンブス新大陸発見500年祭を思い起こしてみましょう(この時は発見と言っています)。

500年祭が近づくにつれて、セビリア万博やバルセロナ・オリンピックといったスペイン主導の祝賀ムードが高まっていたそんなとき、とりわけ先住民を抱える中南米各国から抗議の声が挙ったのです。これまでの『新大陸発見またはアメリカ大陸発見』というテーマ表現が西欧中心の一方的な見方であり、元々あった俺たちの大陸に勝手に侵入しておいて発見とは何事だ。挙句の果て俺たち先住民を従属させ強制労働、略奪の限りを尽くし、文化まで奪ったではないかと。その声は世界に届き、ようやくこのときから『二つの文化の遭遇』と言い改める機運が生まれます。そしてコロンブスのアメリカ大陸到達に端を発した植民地主義という近代を問い正す契機となったのです。筆者などはこの時、歴史認識のずれや歴史が抱える光と影、ことに負の遺産に向きあうことの大切さを学んだつもりになったことを覚えています。そしてコロンブス提督に対する一定の審判は下されたと思い込んでいたのです。なぜならそのころから中南米の多くの国では、この日10月12日(または直近の月曜日)をコロンブス・デーとは呼ばず、『民族の日』と改め、ベネズエラではずばり『先住民抵抗の日』と定めています。そして米国の州によってはコロンブス・デー/アメリカ先住民の日としているからです。

ここで是非とも付記しておきたい事があります。それは先住民の人権を擁護し、黒人奴隷に寄り添い、侵略支配の不当性を訴えた先人たちがいたことを。

エスパニョーラ島(ドミニカ共和国)ではドミニコ会師のアントン・デ・モンテシーノスが、はじめて先住民の虐殺や強制労働などの不当な扱いを非難し、先住民人権擁護の先鞭をつけたのです。

それを受けたバルトロメ・デ・ラス・カサス神父は身の危険をものともせずにスペイン支配の不当性を本国に訴え続け、後に『インディオの保護者』と讃えられます。

モンテシーノス会師

ラス・カサス神父

クラベル神父

さらにカルタヘーナ・デ・インディアス(コロンビア)では、黒人奴隷の扱いに心を痛め解放に尽力したのがサン・ペドロ・クラベル神父でした。

当時は西アフリカ海岸から驚くべき数の奴隷がカルタヘーナに送り込まれて奴隷市場が活況を呈していたのです。奴隷の扱いは市場で取引される物品よりもそれは酷いものだったのです。

「500年の時空を超えた思いの一つが今」でした。

END

*きたじま ひろし　JECK会員　ペンネーム:フェルナンド・峻・世在　専門分野:保健医療、医療機材調達、病院維持管理　JICA任国:イラク、バングラデシュ、インド、コロンビア、ボリビア、中国、モンゴル、ギニア、マラウイ、コンゴ、フィリピン、インドネシア、アルゼンチン、カザフスタン、ヨルダン、パレスチナ
JICA以外の任国:ベトナム、ラオス、メキシコ、キューバ、ドミニカ、プエルトリコ、パナマ、ブラジル、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジア、アルバニア、マケドニア、ボスニア、ルーマニア、コソボ、レバノン、ザンビア、ケニア

私の8月15日

加藤 博通*

75年前、1945年(昭和20年)8月15日、雲一つ無い青空、じりじりと焼け着くような日差しの日だった。

我家のラジオがちょうど壊れており、正午前、母と姉は玉音放送を拝聴に近所のお宅に出かけ、国民学校(戦時中の小学校)3年生だった私は一人縁側から庭先の菜園、トマト、きうり畑の先に大きく咲く向日葵をぼんやり眺めながら過ごし、帰って来た二人からは、「なんか雑音が多くてよく聴き取れなかったが、日本は負けたらしい」と伝えられたように記憶しているが、それに対して何も感慨はなかったようだ。

小学校の夏休みは通常7月21日から8月31日までの40日間であるが、この年昭和20年は空襲警報、授業休止、集団退避／帰宅等に見舞われる日々が多く、夏休みは8月1日から20日間に縮小されていた。その短縮夏休み期間中翌日、8月16日に全校生登校の命があり、鎌倉市立第一国民学校全生徒1,200人が登校、厳暑の校庭に整列、身動き一つせず校長から敗戦の訓示を受けた。池上校長の敗戦訓示はほとんど覚えていないが、「……我が国には昨日の敵は今日の友」という諺があります。そのうち米英兵が上陸してくるだろうが、もう敵兵ではありません。友人なのです。……」と。しかし「鬼畜米英」「いざ来いニミッツ、マッカーサー、出てくりゃ地獄へ逆落とし」「欲しがりません勝つまでは」と四六時中教え込まれた子供心には、そう簡単に意識が変わるものではない。先生、オトナとはなんと恥も外聞もなく、上から言われた事をそのまま伝えて平気なのだろうか。

戦争中、毎朝の登校は近所の生徒達が組をつくり、上級生がその組を引き連れ登校、学校正門を入るとすぐにある小さな「奉安殿」前に整列、最敬礼(天皇陛下万歳、皇軍必勝)をして皆それぞれの教室へ向かい朝礼は教育勅語の暗唱から始まった。

昭和20年に入り鎌倉は被弾こそ無かったが空襲は激しくなり、海岸線は米軍の上陸地帯になるとの噂があった。それに備え体操の時間は学校と海岸の間に残っていた松林に行き「エイヤー」と、先を斜め切した青竹槍の突撃必殺訓練の日々だった。このときはお国のために、兵隊さんに代って上陸してきた米兵に突っこんで行くことが当然で、何の恐怖感も持たなかった。

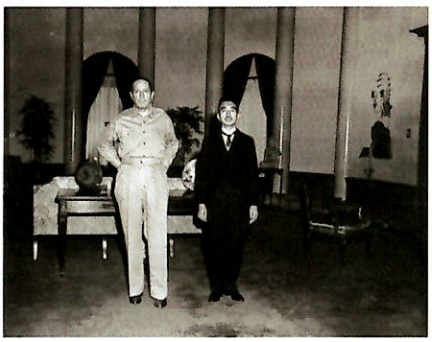
銀座5丁目付近の爆撃による焼け跡
(本文とは直接の関係なし)

私が敗戦を実感したのは、終戦の翌日か翌々日、大島も隠れるほど相模湾いっぱいに、何十隻という軍艦が入湾停泊、我が国軍艦艇かと思ったら米国大艦隊だった。その陣容からこれは負けたと思った。

厚木飛行場に上陸したマッカーサー元帥
(本文とは直接関係なし)

子供心に戦争とは何だったのだろう。先述の池上校長は温厚誠実、立派な教育者で戦後神奈川県教育界に貢献された方であり、8月16日全校生徒に「敗戦」をどのように伝えるか塗炭の苦しみをされたにちがいない。もし自分なら何と講じたか思い至らず先生の胸中を忖度しているが、拭い去れない教育者に対する不信感が根着いたことは事実である。

私は空襲を始め直接戦争の被害には会わず、戦後の教育、社会活動を通じて自己を形成し今日に至っているが戦争の悲惨さにはもう2度と経験したくない。



昭和天皇とマッカーサー元帥
(本文とは直接関係なし)

教育勅語は教育の根本に天皇中心の国体思想が述べられており、戦後廃止されたのは当然とは思うが、そこに教育の基本として述べられた12の徳目は我が国の伝統的道徳観念であるだけではなく、直面している国際開発目標(SDGs)達成の基本理念である。

1. 親に孝行を尽くそう(孝行)
2. 兄弟・姉妹仲良くしよう(友愛)
3. 夫婦はいつまでも仲睦まじくしよう(夫婦円満)
4. 友達はお互いに信じあって付き合おう(朋友の信)
5. 自分の言動を慎もう(謙遜)
6. 広く愛の手をさしのべよう(博愛)
7. 勉学に勤しみ職業を身に着けよう(宗学就業)
8. 知識を養い才能を伸ばそう(知能啓発)
9. 人格向上に努めよう(徳器成就)
10. 広く世の人々や社会のためになる仕事に励もう(公益世務)
11. 法律や規則を守り社会の秩序に従おう(遵法)
12. 正しい勇気をもって国のために真心を尽くそう(義勇)

END

*かとう ひろみち　JECK会員　専門分野:中小企業振興、財務管理　JICA任地:パキスタン、ベトナム、モンゴル、中国、アルゼンチン、マレーシア、カザフスタン　JICA以外任地:ペルー、メキシコ、アメリカ、ハンガリー

NPO法人JECK会報　第35号

【発　行】2020年10月01日　【発行者】NPO法人JECK　【編集委員会】吉田　博至(編集責任者)　大平 一昭　石黒 功　小泉 由紀子
【事務局】横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜センター3F　URL：http://www.jeck.jp/　e-mail：info@jeck.jp
【印　刷】㈱横浜リテラ 横浜市戸塚区上矢部町1965-4　URL：http//www.yokohamalitera.com/　e-mail：info@yokohamalitera.co.jp